東亞同文書院中國調查手稿叢刊

45

國家圖書館 編

國家圖書館出版社

国家出版基金項目
NATIONAL PUBLICATION FOUNDATION

東亞同文書院中國調查手稿叢刊

45

國家圖書館 編

國家圖書館出版社

第四五册目録

昭和七年（一九三二）旅行日誌（第二十九期生）

田實巖

金子曜太郎

中山高

百百増次郎

萩原靜雄※

第四十五卷……一

第四十六卷……一四三

第四十七卷……二五九

第四十八卷……四〇三

第四十九卷……四九三

旅行日誌

第十三班

田實巖

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

東亞同文書院調査報告用紙

第四十五巻

東亞同文書院圖書館印

旅行日誌（第十三班）

序

支那文武官憲の数年来の排日侮日の聲喧傳せられし折柄、昨年九月十八日奉天東北柳條溝鉄道破壊に發端せし滿洲事変勃發後、各省相継いで独立し、東北四省は独立を宣せられ、長年虐政至らざるなかりし張家舊政權は、跡形も敢なく覆され、本年三月一日輝しき滿洲国建国宣言は中外に宣布され、此に中華民国の範圍を離脱し、完全に独立した。而して一意王道主義の東洋理想国家へ、世界の驚嘆、懐疑、監視の中に日覚しく政治経済各部の整理完備へ、

安居樂業の樂天地へ、友邦日本と協調提携して東洋永遠の平和實現に向く目指して滿洲國は進行する。

然り、未だ草昧の（血腥き）生氣溌剌たる滿洲國、而も日本の生命線たる滿洲の光景が見る間に白（と）我等農人を旅へと躍らしめたのである。かくて輝く憧れを胸に抑へて、六月中旬上海を出發し、二月の間、北支一帶を遍歷して張家口へ至り、更に蒙疆興滿洲國へ足を印し、首都新京を經て哈爾濱に出で、松花江を當鏡まで下り、歸路は北滿一帶の大洪水に遭遇したのだった。

六月十五日

大旅行（上海出發。船は長春丸で大連碼頭を九時出帆。

ロシヤ人乗客が多い。それも殆ど婦女子だが彼等は何処へ行くやら。船中の退屈しのぎに皆麻雀、トランプ等をやつてゐる。夏にふると上海はコレラの発生地となり、お蔭様で検疫の御厄介になる。実に迷惑な話だ。

六月十六日

船は青島へ着いたが深い霧のため入港出来ず。一日中停船だ。初めて濃霧の恐さを知る。青島市が霧の為め何も見えない。検疫船が来て検疫も済んだが上陸出来ず。一日全く退屈な日を船上で無意義に過さねばならなかつた。

六月十七日

今朝も霧も晴れて赤い家と青い木の入り混りつつ
た綺麗な青島の町が海に浮び上って見える。朝九
時頃再び中国人の便りない横浪を渡りて 終に碼頭
上陸。 先輩の方から萬屋旅館に定めて世話ひ投宿。
午后先輩田中氏を大倉洋行に訪問す
散歩しながら 洋式の建物の立ち並び アカシヤの街路
樹の下を通って忠の海 海水浴場に出る。 まるで市
全体が公園のやうな気のする処でブルジョアの別荘地
避暑地としては申分無かりう。 更に海岸通りを沿
ふて 独乙舊砲台を見に行く。 独乙人の科学的永
久的構造に感心する。

晩七時より青島先輩の歓迎會に出席ところ、何しろ一緒に大十数人だから豪勢なものだ。

独乙人により建設された次で日本に譲渡され、現在は中国に引渡されて居る。独逸青島邦人の勢力は莫大なもので一万五千位在留し、土地等の所有権も大部は日本人の手にあり、輸出入貿易の大半は邦人の手にて取扱はれ、紡績ビール等の工場もある。殊に紡績は上海事変の影響を受け上海の邦商が不振なるに反し現在大いに活氣を呈して居るらしい。

先輩諸氏は書院上海事件避難當時大いに青島移轉を主張され努力された由なるも書院當局の無関心態度のため物にならず、その事を大分嘆って居う

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

北京。

六月十八日

朝正金銀行へ金を取りに行く。屠牛場（青島軍管公司）を訪問する。元独逸人が経営し初めたものだが現在では中日合弁の會社だ。一方から牛が引き入れられ一方からは肉がなって行き誠に簡単な面、鉄槌、鋸、肉と道具なく支那人が平気で働いてゐる。ほんとうにいやな気持ちになる。

午後町外れの大日本ビール會社を訪問する。大きな釜が四つ備はってゐるだけで、之で麦からビールになると聞いて呆気なく感ずる。ビール瓶の出が出来てゐる。ビール瓶の一年中繰かしてゐるだけが六十万本　四袋で勘

定して二百四十万円の莫大な経費になる様だ。ホップは殆ど全部独乙から輸入し、少し畑に栽培してあった。満洲上海方面へ輸出するのらしい。

帰りに青島神社へ詣でた。日本人の行く度毎ず神社があるが何と大きい物よ。櫻の並木の階段を上って行く時は日本如居る様だ。青島の町はまだ何と言っても日本人の勢力の町だ。町の看板でも大概日本語が書いてあるのに驚く。

晩十時の汽車で済南へ向け出發する。キッカリ十時に出發したのには驚く。中国人が皆一時間位前から乗車して場席を占領してゐる。我々の座席以外に相当書院の同僚が乗ってゐる。中年の日本人夫婦が子供一人連

れて乗った。博山の炭砿で働いてゐる人だ相だ。
車中も追々混んで来て座ったまゝでかうたつ相も又つらい。

六月十九日

五時過ぎ張店につく。淄川博山方面への分岐点だ。雨がぼソ〳〵降ってゐる。山が西方面に見え その間廣い平原が續いてゐる。魯の桑の桑樹が高く育ってゐる。
八時頃清南駅へ到着する。書院生徒一同整列して
総領事館へとかゝる。今朝の雨で道がとても悪く車は
泥の中を走る。経緯の大道が整然と縱横に走って
ゐる。今日は日曜日で領事館は休みだ。
物置見たいな法廷に導かれ一先ず荷物を置いて落
着く。つかれとねむけとひもじさで閉口する。十時頃

一碗乾湯麺見たいな物を御馳走になる。
十時頃から馬車を雇って濟南の名所見物に出掛ける。
濟南の町は大きい道だけは通ってゐるが上海から来た僕等には さびしい感じのする町だ。ほんとに暑い。而も今朝雨が降ったからまだ好いのですよと言はれて見れば、餘程暑いらしい。
真先泉から廣智院、大明湖 そして城壁へと馬車を走らす。成程昔からの舊所で名高いが行って見て餘りつまらぬのにがっかりする。そして暑さと馬車が上下縦横に揺れるのばかり気にふる。見し城壁だけは中々立派なものだ。堂々たる幅廣い高い城壁には日本軍も少からず困難を感じた事が歴然かれる。

午后西田総領事の話を拝聴する。書院番が領事館と剣道をやったが皆元気で負ける。泰山曲阜行も馮玉祥が駐軍してゐるから行けぬ。済南は政治的に重要地点だが原色の町だ。一泊の必要も無からうと六時半の汽車で北平へ向けて出發する。

きたない汽車の上に一杯混んで座席など有りやしない。済南駅を出て少しして黄河の鉄橋にさしかかった。黄色い濁った河で川面は狭い様だが、何処が河岸とも見分けがつかず両側には畠が続いてゐる。黄土層では黄河の氾濫も大したものだらう。鉄橋は随分中々長い。鉄橋は長年修理せず スピードもあげぬらしい。

六月二十日

乗り通しの汽車旅行は中々つらい。其の上中国の汽車は腰掛が板だし、南京虫が澤山居るのだから。

天津の町を素通りして北平の正陽門駅に到着したのが十一時頃だ。

先ず公使館へ行って先輩に宿屋の話を聞きに行く。公寓か、一般館かと考へてゐる中に他班の者が正金住宅に宿りて貰ふと聞き、早速正金銀行へ行き、宿めて貰ふ事になる。此の辺一帯が東交民巷と云ふ列国各公使館の所在する所謂公使館区域であり、整然と一区劃を為し、国際法上地外法権の著しい特例を為し、各国の軍隊警察を有して独国の一切の干渉を入れない処だ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com